

高津の思い出

2023-1-15

野口幹夫

KOZOOM サロン27の1月のサブテーマの一つは高津時代の思い出です。先月の野田さんの発言で高津時代の日記を見ながら、あの時間は人生の珠玉のような時だったといわれたのがきっかけで、これは我々の共通のテーマであり、これからも毎月続けるサブテーマとしたいと思います。



それは先生方の思い出、仲間たちの思い出、教室のある時の思い出、部活の思い出、記念祭の思い出 建物や施設の思い出などなどなど、どれにもそれにまつわる懐かしいものがありでしょう。どうぞ思い出して記録していただいて、皆の共有のものにしませんか。

今日のわたしは仲間たちについてです。

1年の教室 初めての授業は担任だった大和久先生の物理の授業でした、その教室で隣の席に座ったのが安保公博君でした。彼も私も背が小さかったので前列に座りました。声を交わしたのが初めてで、そこから終生の友になりました。まず新聞部に一緒に入りました。お互いの家を訪ねそれぞれの背景を知りました。彼の一家は満州からの引き上げで、大家族、お父さんが千日前の仏壇屋の務めリヤカーを引いて重い仏壇の配達をなさっていました。彼も

たびたび我が家にも来てもらいました、印刷工場を運営していた我が家は広い 2 階に自分の 2 部屋をもらい、その一つを音楽のリスニングルームにしました。ベートーベンの運命や田園交響曲をいっしょに聞いて感想を語り合いました。近くの天王寺公園の池でボートに乗って遊びました。彼はきれいな標準語を語りました。それに合わせるべく自分の言葉から大阪弁を追放していきました。

彼と同じ満州引き上げで標準語を話す優秀な仲間の一人が新聞部に現われました。村尾行一君です。彼は私のような新聞屋ではなかったのです。彼の本拠は社研部で、そこから高津新聞を彼がもくろんでいる方向にもっていこうとの狙いをもって入ってきたのです。すなわち学生の自治活動を活発にし、高津新聞をその自治会の機関誌としてのミッションを与えようとしてきたのです。何も知らない僕たちに彼は鋭く指導していきました。マルクス主義、社会を変えていく革命思想に衝撃的に出会ったのです。

人生を揺るがす体験でした。ある日 彼のいうままに、高津の授業を二人で抜け出しました、その日京都大に天皇訪問するのを待ち構え 学生たちがその戦争犯罪を追及するデモで取り囲むという計画を彼が知っていて、それに紛れ込んだのです。この稀有な事件を記事にして、高津新聞の号外として報道しました。おもえば危険な行為でした。勝手に授業を抜け出し、高津とは関係ない事件を報道する。今から思えばとがめられて当然です。しかし 幸い高津の先生方の暖かなご配慮で、この新聞は発送停止 つまり学校から外に出すなの処分だけでした。退学にもなりませんでした。

新聞屋として仲間は石原靖造さんです。あの頃から彼は背が高く抜きんでいました。森ノ

宮にあった活版印刷所が 昔から高津新聞の編集製版印刷をやってくれていました。当時は活字一つつひらって木のケースにいれ、文章にし、それを大きな紙面に配置していくというのが編集作業でした。それを職人さんと石原さんが立ち会いながらやっていくのです。石原さんがそれをずっと黙々とやってくれたから 高津新聞の毎号が誕生して行ったのです。

石原さんは自分が幼稚園で通った文の里にお住まいで、お宅に遊びに伺いました、入口の庭に独立した小屋のような音楽ルームをお持ちで、LP プレーヤーとアンプが配置されていました。ここで初めてベートーベンのピアノコンチェルトを聞かせてもらいました、今もこの曲のしずしずと始まる序奏を聞くとあの小屋を思い出します。

新聞仲間といえば小林佐知子さんのことをあげねばなりません。彼女は河原町の古い歯医者の娘さんでした。彼女はこまごまと われわれをとりもってくれて、特に新聞に掲載する広告主を探してくれることが得意でした。この広告収入で、時折 部室ですき焼きパーティをやることができました。

新聞部の部室は中庭から体育館にぬけていく道に外階段があって、その中2階でした。ここで中庭に面した音楽ルームで弦楽部が練習していたモーツァルトのアイネクライネナハトムジークが聞こえてきました。その第1楽章を聞くとあの高津の部室を思い出すのです。

なんと 今年野田さんから頂いた年賀状に 彼もそれを聞いていたと書いてくれていました。津田さんの思い出とともにです。

伊藤君・村尾君・小林君には先立たれました。冥福を祈りつつ、また天国で再会出きることをねがって筆をおきます。